

「平成25年度総会・記念講演会」 「災害ボランティアリーダー養成講座」 東日本大震災の振り返りと復興

平成25年度 総会・記念講演会

平成25年度「災害ボランティアぐんま」の総会が6月8日に県庁において開催された。24年度事業収支報告及び25年度の事業計画、予算案等が承認された。

次いで記念講演では、いわき観光ボランティア語り部である佐藤トミ子氏が、東日本大震災発生時の状況を語った。

（一部を要約して次に掲載）

◆東日本大震災から2年

～いわきを語る～

佐藤と申します。いわき市観光協会の語り部をさせて頂いております。いわき市はどこにあるか、分かりますか？端っこの方にあるんですよ。私は久之浜町に住んでいます。第一原発から30kmの地点です。第二原発からは20kmのところにあります。

私たちの町ですが、今まで津波が来たことがなかった。誰も津波の心配していない。そういう状態でした。

3・11のとき、私の友人が私の家に来ていたのです。お茶を飲んでいたら、がたがたと揺れました。ジェットコースターのように、立っていられません。突然堤防の方から「逃げる」という



声が聞こえました。そしたら約1時間後町の中に7.2mの津波が来ました。次に町が火事になりました。たかが猫の額くらい小さな町ですが、77軒が燃えてしまいました。私たちは山の高いところからこれを見ていました。

私たちが逃げ込んだのは、龍光寺です。避難したときに一番可哀想だったのは家族がバラバラになった家です。龍光寺さんに「うちの母はいませんか？」と尋ねて来るのです。「うちの息子がいませんか？」と来る。皆さんにお伝えしたいのは、逃げることを約

束しておいてくださいということ。

男のお年寄りは逃げまじうと言っても逃げない。「ここは津波なんか来ないんだから、いちいち逃げていられるか」と。そこで奥さんが「逃げようよ」と言っても、のんきにたばこを吸っている。「そんなじいちゃん、知らね」とお婆さんだけが隣の若い人と一緒に逃げたら、お爺ちゃんが行方不明になって、十日も過ぎてから見つけられた。すると、お婆さんは気に病む訳ですよ。「あのとき、首根っこ捕まえても連れて行けば良かった」と。結局、お婆さんも病気になるてしまふ。私たちは言われたらすぐに避難することも大事だし、救えなかったという自責の念も、それはその人の運命だったのかなあと割り切らないと、生きていけないのではと、2年3カ月が過ぎて思うようになりませんでした。

13日の朝、原発事故のニュースが私たちのところに伝わりまして、久之浜町全町民避難ですというお達しが来ました。それで湯本高等学校の体育館に避難させてもらいました。

私が最初にやったのは、避難所の名簿作りです。「家の親がここに来ていますか？」「子どもが来ていますか？」とか、問い合わせがあったときに、避難者名簿がなかったら全然分からないからです。とにかく体育館の入口に受付みたいなものを作り、来た人に名前と住所と年齢を書いて頂きました。

避難生活では、自分たちで出来ることは自分たちでしよう。びっくりしたのは、避難生活を送っている時、車椅子の人のために自分からスロープを

作ってくれた人がいました。犬連れて避難した人には、犬の脚洗い場を作ってくれた人がいました。全部これは自分たちで考えてやってきていました。夜は、危ないということで、男の人たちが巡回してくれました。そういう人たちには、次の日の朝に、「誰々さんがこういうことをやってくださいました。皆で拍手しましょう」としました。すると、さらに自分から色々やってくださる方が増えました。(以下略)

決して生活がしやすいとは言いがたい避難所での生活を、女性は物資の配膳、男性は巡回、高校生は子どもたち

のまとめをする等、各々ができることを協力して乗り切ったとのことでした。

記念講演会を聞いて

星 雄二(高崎市)

総会終了後、福島県いわき市から来場された、佐藤トミ子さんの講演を、会員約40名でお聞きしました。佐藤さんは、赤十字福島県支部評議員として赤十字活動に従事されており、又、今回震災には自宅を破壊される被害を受け、地元いわき市の避難所へ避難され、そして積極的にその運営を地元の復興

災害ボランティアリーダー養成講座

平成26年2月1日、リーダー養成講座を開催した。一般参加者も交え38名の参加があった。第1部講演講師の齊藤健祐氏は群馬県太田市出身で、直接のボランティアや遠隔地からの後方支援で活動してきたが、旧知の仲間の顔や景色に引かれ、勤めていたIT企業を退職して、「いわて復興応援隊」の活動をしている。その講演の内容を一部省略編集して掲載した。

また第2部では日本防災士会群馬県支部様のご協力を得て、HUG(避難所運営ゲーム)というゲーム感覚での研修を行った。

被災地から見た災害ボランティアと今後の復興支援

私は一般社団法人「SAVE TAKATAI」に所属し、被災者の見守りやケア、農業・漁業支援といった復興に伴う地域協力、地域興しの活動等を行っています。

内容は、パソコンの講習、ホームページの開設や更新、運用のサポート、あるいは在宅ワークを提案して仕事を斡旋するようなこととしております。また「被災地健康マップ」というものを

作って、仮設店舗に移転した、再建した、営業時間が変わった等、新聞に載っていないような細かい情報のマップを作っています。

他にも仮設住宅支援、慶弔、再建や仮設から仮設への引越、三陸鉄道を使って町興しの意味も兼ねて「まちコン」を開催したりしているメンバーもいます。あまり名前を知られていないのですが、「米崎リンゴ」と言うリンゴをいかにブランド化して東京などに

に係わっております。

当日地震発生直後に、近隣の高齢者の手を引いて高台のお寺に避難して、病人と高齢者の部屋を確保してから、まずしたことは避難者の名簿を作成したことです。すばらしい機転だと思いました。地震発生が平日の昼間のため家族が自宅、職場、学校とバラバラになっている状況の中でその所在や安否確認には重要な事だと感じました。

災害時に避難所で、大勢の人が不自由で制限された「食」と「住」の生活を少しでも辛さを和らいで生活を送るために、七箇条要点をまとめられたの

は、貴重な体験からだ敬意を表しました。

第二次の津波後に火災が発生して、丸一日燃え続けて77軒が全焼した報告には、津波と火災言い換えれば、「水と火」が同時にもたらす災害にも警戒すべきだと思いました。震災と津波の恐怖と悲しみ、不自由な避難所の生活、将来の事等被災地の皆様は、大変辛い体験をされましたが、着実に復興の道を歩まれる事を願っています。

又私達もこの記憶を心にとどめ、災害の備えとしていくための有意義な機会を頂きました。

少し紹介させて頂きます。

最初に被災3県のボランティアの数ですが、平成23年5月には十八万二千四百人でしたが平成25年11月には八千八百人となっております。ボランティアセンターを覗くと、土日はボランティアさんが来るのですが、平日は来ない状態です。ニーズも減っているのですが、いかにボランティアを維持していくのが各ボランティアセンターの課題にもなっています。



売っていくかのプロジェクトを担当している者もいて、活動は本当に多岐に渡っています。

災害ボランティアの経験は少なく、後方支援が多いですが、受け入れ側から見た災害ボランティアということでは、

今ボランティアさんがやっていることは仮設住宅の引越しの補助ですね。二つ目は漁業支援です。ワカメの収穫とか軽く茹でるとか、塩蔵ワカメとかそういったところをボランティアさんが補うようなこととしています。もちろん、農業支援もあります。三つ目は遺体・遺留品捜索です。土を掘り起こした場所で見つかることもあります。

災害ボランティアに関する問題もあ

ります。ボランティアセンターで直接聞いた話ですが、宿泊場所や移動手段の確保、住宅内の器物損壊、希望以外のボランティア活動やゼロ泊日程や運転手の疲労等の無理な日程、こう言ったトラブルが未だに発生しているということ。ボランティアの方はそれほど気にしないかもしれませんが、現地としては避けて欲しいと。お互いに気を遣いながら、今後も活動をしていつて欲しいなと思っています。

最近の傾向としては企業のボランティアがあります。入社したての新人研修がありますが、その後全国に配属され一回散らばってしまったものを集めて研修しようというときにちょうど良い教材となり、被災地に行つて4泊5日の日程で活動しているのです。あとはボランティアのリピーターさんです。何度も訪ねてくれるリピーターさんはいます。

またボランティアはあまり出来ないけれど、観光で来たよとか、あの人にもう一回会いたいので来たよとか。今でもつながりがあり現地で飲んだり、一緒に泊まらせてもらつたりとか、そういうボランティアさんは今でもいます。

復興支援の中でボランティア以外の支援もあります。大きく分けると物資とイベントになります。物資は正しいって飽和状態です。今でも衣服を送つて下さる方もいらつしやいます。有名なキャラクターグッズを送ってくる企業もある。その他に、農産物もあつて、支援ということで他県から果物とか送ってくるのですが実際には飽和状態。かつこつこつものを送られると、地元の

農産物があるのにも関わらず、外からの支援で一時的にですが地元産業を奪つてしまつてもあります。

あとイベント系ですね。東北ではこういったものは機会が少ないので喜ばれています。ただ、学校の授業の中の時間を使つてやらせてほしいとかは、教育のカリキュラムや学校の計画を狂わしてしまつ、あるいは児童がボランティアや支援してくれたことにお礼を書くとすると授業の時間を奪われてしまつてということに困つていと聞きました。

やはり、やるのだつたら地元のためになるかを考えて、振り分けながらやる必要があります。ここにこういったニーズがありますよとかが伝えられないのですが、マッチングを手助けするようなサイトを岩手県が開設したりして、こういった支援を求めていますと知らせています。そういうものを参考にしてつ支援をおねがひしたいと思ひます。支援、支援では一方通行で、それ以降のつながりが維持しづらいですけど、そういうのを考えている方がいらつしやれば、参考にして頂きたいなと考えています。

沿岸部はもとも過疎の問題を抱えています。被災地は過疎をテーマにして今後支援していかないと、町自体がなくなつてしまひますので、それを考えていかないとと思ひます。

被災者が思ふ復興の実感を聞きました。家を流された方は自分で家を建てられた、そのときそれが復興と考える方もいらつしやいます。家を流されていない在宅型被災者の話をしますと。家も流さ

れていない、家族も誰も亡くなつていないという方も被災者であると考え方もあります。それは、家を流された方たちから、「おまえの家はいいよね、家がながされなくて。家の心配なんてないよね」と皮肉られる方もいらつしやるし、家を流されていない子どもが学校でいじめに遭つとか。そういう問題も実際にあつて、私も話を聞いて驚きました。そういうのは私たちのように現地で働きのながら活動している者でないと分からないことでもあります。

在宅被害者という、家を流されたほうが良かったのか、流されないほうが良かったのか、そもそも災害がなければいいのですが、災害を契機にメンタル面の問題が生まれているのが現状です。

被災地を「被災地」とだけ考えてはいけない。過疎高齢化がもともとあつた地域ですし、震災復興だけをテーマにしただけだと、十年二十年したら終わつてしまつ。十年二十年後にその町があるという保証はないのです。過疎・高齢化、若者流出に対応した活動をしない限り、本来の復興にならないと思ひます。復興したところで人口が減つてしまつていては意味がない。ここにフォーカスを当てて活動していくしかないかと思ひます。

震災から3年がもつ少しで経ちます。被災地の、この震災をどう活かすかを考えた場合に、やはり群馬県の場合は、バックアップの機能を群馬県が担うのてはないかなと思ひます。ボランティアを派遣したり、向こうからの避難を受け入れたりとか。新幹線、高速道路もあるし自衛隊がいて、ヘリポー

トもあります。病院もあります。バックアップの機能からして群馬県が中心になるのではないかと思ひます。

今度の震災を次の震災にどの様に教訓とするか。群馬県は震災を受けたことが少ない。防災に対して沿岸に比べると危機感が少ないと思ふ、ソフト面で人の気持ちはどう変えていくか。実際に群馬県で災害が起きるといふよりも、首都直下や南海トラフが起きた時に群馬県はどう対応するかを考えていく必要があります。

最後に、被災地とのつながりがない、ボランティアニーズがないということ。考えると、なかなか被災地と関わりが持てない方もいらつしやると思ひますが、観光で被災地に来てくださるだけでも全然構わない。物産展が群馬や東京で開かれたときに、被災地のものや三陸のものを買おうということも被災地の支援になりますので、そういったことを皆さんにやつていつて欲しいなと思ひます。

避難所運営訓練ゲーム

「HUG」に参加して

大塚 智義(群馬ヤクルト販売株式会社)

平成26年2月1日(土)に開催された「災害ボランティアリーダー養成講座」に参加させていただきました。当日のスケジュールの中で「実技」と表示がありました。ゲームはH(避難所)U(運営)G(ゲーム)の略で、4〜5人ずつのグループで5グループで行いました。ゲームは「災害が発生した」と想

定し、学校に地域の住民をはじめ色々な方が避難してきます。その時に学校を避難所としてどんな対応をしたら良いか、といったシミュレーションゲームでした。高齢者の方や、ペットをつれて避難してこる方、病気や怪我をして避難する方、妊婦の方、認知症の方、外国の方、旅行途中の方、など様々な避難者が押し寄せ

富岡市総合防災訓練に参加

平成25年5月19日(日)、富岡市「二ノ宮運動場」を会場に、富岡市総合防災訓練が行われ、約40団体が参加した。会員10名が災害ボランティアセンター設置訓練に参加し、救援物資輸送、資材受入等に取り組んだ。また岩井会員が富岡バイクボランティアとして、救援物資輸送訓練に参加しました。

富岡バイクボランティアの活動紹介

岩井 進(富岡市)

富岡バイクボランティアの発足は平成17年5月12日です。阪神淡路大震災、新潟県中越沖地震の発生時4輪車の通行不能の場所へ2輪車のバイク隊が活躍し、その存在が知られるようになり元市役所職員佐藤氏(現メンバーであり市議会議員)の発案によって県内唯一富岡バイクボランティアが13人のメンバーにより発足したものです。

チームメンバー13人は職種年齢等さまざま。チームリーダーは私で72歳元埼玉県警白バイ隊員、サブリーダーは自営業の若手で2輪車安全運転群馬大会上位入賞、技術者、新聞販売店経営のバイク常連等とのチーム編成です。

てきます。こういった避難者をグループで判断し、効率よく振り分けていくといった内容でした。ゲームに参加して感じたことは、つきつきと避難してくる避難者を上手に振り分けるには、「とつさの判断力」や「事前の準備」がいかに大切かといったことでした。病気や怪我をした方が避難されてきたとしても、とつ

日常は各々バイクを時々乗り回す程度ですが、年数回チームの仲間と遠乗り、ツーリング又自動車教習所のコースを借りて2輪車のインストラクターより技術指導を受ける等の訓練も、その際消防署員の指導を受けAED(自動体外式除細動器)使用の講習受講有資格者です。

年間の活動は富岡市が毎年5月に実施する防災訓練にチームで参加(平成25年は7人)し、物資輸送と避難所の人員確認の訓練等を体験しました。

バイクはそれぞれ自己所有のバイクで排気量、スタイルはバラバラ。精鋭軍団の行動、乗車、移動等は時折の訓練の結束で見事なものです。幸い災害出動はゼロですが、事件発生時には団結し行動が実行できるものとリーダーは確信しています。

さに判断するにはある程度の知識がなければ判断できないし、避難所として使用する学校の状態も普段の状況を把握しておかなければ、いざ避難所として運営するにもスムーズに運営できないと感じました。今回の参加を機会に普段から防災に対して意識を高めていきたいと思えます。

尚、私は平成24年9月1日(土)防災の日(東京目黒区で実施の防災訓練に参加、平成25年の3月30日(土)は宮城県南三陸へガレキ処理活動に参加色々の体験をしました。こうした日常の体験を生かし、災害発生時には安心、安全の生活が一刻も早く実現できるように、公助・共助・自助の手助けができるようにと頑張っています。その為に常日頃自己の健康管理、体力の維持向上に努力している72歳の若老人です。

参考：県内のバイクボランティア団体は、富岡市一市のみ又災害ボランティア団体バイクネットワーク関東が1都9県に登録され活動しています。



県総合防災訓練に参加

平成25年9月7日(土)、伊勢崎市「八斗島ちびっこ広場」を会場に、群馬県総合防災訓練が行われ、群馬県、伊勢崎市ほか約90団体が参加した。会員19名が災害ボランティアセンター設置訓練に参加し、散乱物の分別・清掃、泥だし、土嚢袋づくり、災害時要援護者等避難所対応訓練活動等に取り組んだ。

危機管理フェアに出展

平成26年1月17・18日の両日、県庁1階県民ホールで県民の防災・危機管理への意識高揚を目的とした「群馬県危機管理フェア」が開催された。約21団体が個別のブースを設けた。会員11名がパンフレット配付、写真パネルの展示等により、災害ボランティアぐんまの活動の一端を紹介した。

編集後記

災害ボランティアぐんま通信の編集を行っていた2月に大雪が群馬県をおそいました。災害ボランティア募集に関する情報が次々と更新されるため、迅速性のある災害ボランティアぐんまHP (URL: <http://www.12.wind.ne.jp/savior/>)、メールにて会員の方へご連絡を行い、現地へ赴いていただきました。26年度以降の会員登録を予定されている方で、メールアドレスをお持ちの方は是非登録をよろしくお願いします。(災害ボランティア事務局)